

核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会 会報

2014. 8. 25
核兵器廃絶をめざす
富山医師・医学者の会
富山市桜橋通り6-13
電話 076-442-8000

7/27

核兵器のない平和な世界を未来の子どもたちに残そう

映画「千羽鶴」上映と被爆体験を聞く会



司会を務めた
小栗 絢子 世話人副代表

7月27日、核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会（以下、核兵器廃絶医師の会）は映画「千羽鶴」上映と被爆体験を聞く会を開催しました。これには富山県被爆者協議会と

富山県保険医協会が後援しました。

会場となったサンシップとやまの福祉ホールは老若男女112名の参加者が訪れ、69年前の原爆投下の悲惨な実相と真正面から向き合いました。

司会を核兵器廃絶医師の会の小栗絢子世話人副代表が務め、主催団体を代表して金井英子世話人代表が挨拶をしました。

映画「千羽鶴」は、2歳で被爆し6年生のとき原爆症で亡くなった広島少女・佐々木禎子さんと原爆の子の像建立のエピソードにもとづいて、1958年に制作公開されたものです。映画の撮影は佐々木禎子さんの家だった床屋、通学した幟町小学校と教室、入院した原爆病

主な内容

- 映画「千羽鶴」上映と被爆体験を聞く会 主催者挨拶（金井代表）…………… 2
- 被爆体験を聞く会「原爆の実相、被爆体験からみた平和への道」飯田國彦氏 …… 3～ 8
- 核兵器廃絶医師の会 2012～2013年度の活動報告…………… 9～10
- 核兵器廃絶医師の会 2014～2015年度の活動方針、決算報告・予算、世話人会……………11～12

院などで行われ当時の記録としても重要な作品です。

映画上映後、県被爆者協議会会長代理の田島正雄氏は、会員の高齢化と相次ぐ訃報で、被爆の実体験を若い世代に伝えることが次第に難しくなっている現状を訴えました。

今年、生々しい被爆体験をお話いただいたのは飯田國彦氏。3歳で爆心地から900m地点で被爆、母と姉は相次いで亡くなり、氏自身も無数のガラス片が突き刺さった傷が化膿、栄養失調でその傷口が閉じるのに7年もかかりました。（詳しいお話は3ページから）

原爆の恐ろしさを語り継ぎ、原発事故から子どもを守りたい

主催者あいさつ

世話人代表 **金井 英子**



わたしども核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会は、核兵器をなくしたい、悲惨な戦争をなくしたい、と願う医師と歯科医師の集まりです。人数はそう多くはないですが、1989年から

25年間、地道に活動を続けてきました。

被爆体験を聞く機会をできるだけ続けたい

私どもが主催する企画で、被爆者の方のお話を聞くのは今年で3回目です。お手元の資料にありますが、2008年に富山県被爆者協議会を取材したときには会員数は102名、2010年に第1回目の「被爆体験を聞く会」を開催したときは97名、そして2回目の昨年は50数名となっていました。

このように今、被爆者の皆さんの高齢化が急速に進んでいて、貴重な体験談を聞くことが次第に困難になってくると思います。私たちの会では、これからは毎年、この被爆体験を聞く会をできるだけ続けていきたいと思っています。

お話される飯田さんと映画の「さだこ」

昨年は、アニメの「はだしのゲン」を上映しました。今年の企画は映画の千羽鶴より先に、お話される方が飯田國彦さんに決まりました。飯田さんは3歳で、広島爆心地から900mという至近距離で被爆され、奇跡的に助

かった方です。そこで、映画については、飯田さんとほぼ同じ年齢で被爆し、一旦は元気に育ったのだけれども12歳で原爆症で亡くなった少女、佐々木禎子さんをモデルにした映画「千羽鶴」を選びました。ちなみに私の旧姓も佐々木です。そして私の父も広島で被爆し、30年近く前に亡くなりました。

この映画は1958年に制作公開されました。画像は白黒です。けれども撮影現場や風俗はさだこさんが生きた当時とほぼ同じと思われ、記録映画として非常に価値があると思います。ただ、病名の告知という場面においては現在の感覚では違和感を覚えます。しかし、当時は多分それが普通であったのだろうと私は解釈しています。そして、登場する先生と子どもたちの行動や考えの純粋さや美しさは時代を経てもいささかも衰えることなく私たちの心に響くだろうという事を予告させて下さい。

原発事故による子どもたちの内部被ばく

1986年のチェルノブイリ原発事故では放射線の高度汚染地区において明らかに幼児、すなわち子どもの白血病が増加したという結果が出ています。そして被曝線量の増加に比例して病気が増加すると報告されています。また、ギリシャではおなじくチェルノブイリ原発事故の汚染により乳児白血病が増加したということが、1996年のネイチャーという有名な科学雑誌に掲載されました。これらはすべて内部被曝、すなわち放射能、おもに放射性セシウムですが、汚染された食物を摂取したことによる体内被曝が原因とされています。福島第一原発事故によって被曝したフクシマの子どもたちにも甲状腺疾患以外にも内部被曝による病気の増加がないか注意深く観察して行くことが必要です。

少しお話が難しくなりましたね。お許し下さい。

では、どうかゆっくりご覧下さい。そして、心の目に焼き付けて行って下さい。

富山県被爆者協議会を代表して

お忙しいところ、たくさんお集まりをいただきありがとうございます。私は県内の被爆者のお世話をさせていただいている田島と申します。

1945年、昭和20年に広島と長崎に原爆が投下されて来年は70周年となります。被爆者も相当高齢になり、現在の平均年齢は80歳でございます。毎年会員の訃報を聞き、会員数が急激に減少して、この先私たちの会はどうなるんだろうかと気がかりでございます。

私たちは原爆から受けた傷を舐めながら、今日まで必死に頑張ってきました。再び被爆者を作らない、そのための核兵器廃絶を願って、不幸にも被爆した現実を正確に、正直に皆さんに伝えていくことが、私たちの使命だと思っております。それでは飯田國彦さんをご紹介します。



富山県被爆者協議会 会長代理

田島 正雄 氏

被爆体験証言 「平和への道」



広島爆心地900mの「ヒバクシャ・孤児」

飯田 國彦 氏

NPO日本交流分析協会理事北陸支部長
富山ユネスコ協会副会長、心理カウンセラー
富山福祉短期大学看護学科非常勤講師

1. 原爆の悲劇・実相

原爆の実相を伝えるのが使命

私を含め「ヒバクシャ」の使命というのは、自身の被爆体験を語るのももちろんですが、原爆の実相というか、原爆というものが実際にどんなに悲惨なものかを伝え、そのことによって核兵器の廃絶をめざすことだと思います。そこで今日のお話は前半に「原爆の悲劇・実相」、後半に私の被爆体験をお話して、もし時間に余裕があれば将来に向かってどうしたらよいか、また福島原発からの復興についてもふれたいと思います。



爆心地の悲劇

左側の建物（前ページ）は広島県の産業奨励館で、当時市内でもっとも大きく、立派でした。これが右のように一部だけが残り、中にいた多くの人たちは一瞬にして灰になったというのが現実です。下段左は高熱によって溶けた瓦、右は燃えるものはすべて無くなってしまった広島です。爆心地の爆風の温度は3千数100度、鉄、ガラス、瓦をも溶解しました。人間は瞬時に「白骨化」というより、あまりに高温のために骨の形をとどめず、ドーム内の遺品は腕時計が1個のみだったのです。

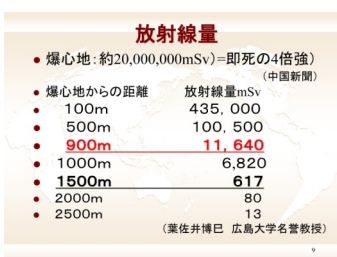
なぜ幽霊のように手を前に出すのか

爆心地周辺では、光熱によって衣服は瞬時に消え去り、皮膚は剥がれて垂れ下がった。皆さんも何かでご覧になったことがあるかと思いますが、被爆直後の被爆者が幽霊のように手を前に出して歩いているのは、腕の肉と腹の肉がくっつかないようにするためです。皮膚がなくなったので、手を下げると腕と腹がくっついてしまうのです。人々は水を求めて、川の中へ次々と投身して亡くなっていきました。

学徒動員で行進中の女学生は、原爆によって周囲が真っ暗になり、目標とするものが何もないので、迷子にならないように手をつないで行進しました。しかし、繋いでいたはずの手の皮がむけて、散り散りバラバラになってしまった。これはたまたま学徒動員を休んでいて、只一人助かった関千恵子さんという方の証言です。

放射線量・爆風・温度は

その放射線量はどうかだったのか。爆心地から100m地点で43万5千ミリシーベルト、私の被爆した900mは1万1640ミリシーベルトでした。爆風は100mでは秒速277m/sというとてもな



い速度で、1キロ地点で秒速132m/s、強い竜巻の2倍以上です。

温度は爆心地では、3500~4000度で溶鉱炉の2倍以上、鉄も綿菓子のように溶けてしまう温度です。100mで2000~3000度、1500m地点でもほとんどの物に着火し、直撃を受けた人々は致命的な熱傷を受けたというのが実態です。

原爆で亡くなった人々の数

ヒロシマでの原爆によって、その直後から年末までに亡くなった人は、14万人±1万人であると公表されています。投下直後の死因は、爆風・高温によるものが大部分で、その後は放射能による死者が増え続けました。

- ・爆風によるものが約75%、約10万人
- ・熱線や温度によるものが約15%、2万人
- ・放射能によるものが約10%、1万4千人

それ以降、多くの被爆者が白血病、ガンを患い、精神錯乱状態で亡くなりました。

ロバート・リフトンNY市立大名誉教授が出した「ヒロシマを生き抜く」（現代岩波文庫, 2010）によれば、爆心地から1.2kmでその日の内に50%が死亡、それより爆心地に近いところでは、その日の内に80%~100%が死亡、その後も死者は増え続けた、とあります。

白血病やガンの恐怖

一度放射線によって傷ついた染色体は、直後には細胞が生存を諦めるアポトーシス、いわゆる細胞が壊死していく、それを惹き起こして直後に1万数千人が亡くなりました。

6~7年後からは、さきほど映画でご覧いただきましたが、原爆の子の像の佐々木禎子さんを始め多くの被爆者に白血病をもたらしました。10年後からはガンを惹き起こし、10万人以上が亡くなりました。被爆後69年の現在では、今のところ有効な治療法が見つからない不治の病（MDS：骨髄異形成症候群）となって次々と被爆者の命を奪っています。私自身もこれに罹る確率が非常に高いと思っています。

最近、ある被爆者が「私の体の中に原爆が居る」と言って亡くなりました。被爆者は、放射線によって傷つけられた染色体の変異によって、次々と惹き起こされる病との終り無き闘いを、生涯に亘って強いられています。子孫への影響も考えると「生涯」で終わらないのではないかと、「将来」の不安とも戦い続けなければならないのかと、ヒバクシャに心身の安心はありません。

近距離被爆者12人生存

900名以内で被爆した人の中で、私が今も元気に生活している唯一の人間かと思っておりますが、先日のテレビで500名以内で被爆して奇跡的に助かって、今も生存している方が12人いることが分かりました。

69～97歳の男性2人と女性10人です。どなたも堅固な鉄筋ビル（日銀、富国生命、国民学校）の陰であったり、満員の路面電車の真ん中にいて、直後の熱線・放射線の直射を免れた人たちです。もっとも、生き残っておられるといっても半数がガンに罹り、内4人は重複ガンで、寝たきりで通常の生活はしてられません。

原爆ノイローゼを使命感で乗り越えた

長い間、被爆者で精神を患って亡くなった人は少なかった、と言われ、それに対して私は非常に違和感を感じていました。先に紹介したリフトン教授によれば、白血病やガンを

患い亡くなっていった被爆者は、それに「原爆ノイローゼ」を併発して精神錯乱状態で亡くなっていったとのことでした。

長崎で調査されたことに、心理的曝露ということがあります。健康被害が出るほどの放射線被曝ではないと国がしている地域で、原爆投下を実際に目撃した人の多くは、「半世紀以上を経ても、精神疾患の危険性が高い」という調査分析結果を、2012年に国立精神・神経医療研究センターが発表しました。

東日本震災でも見られましたが、大災害の直後は心身ともに受けた甚大な被害を感じないよう被爆者は「心理的締め出し」を行って乗り越え、その後「原爆ノイローゼ」に陥り、それを「精神再形成」で乗り越えました。原爆病への怯えや社会的・心理的苦痛を受け止め、平和への使命感、自分の体験を将来の平和に活かすという使命感で乗り越えてきたのです。

ここまで原爆の実相の一部をお話しました。この後は私自身の被爆体験をお話しします。

2. 私の被爆体験

満州から広島へ

私たち親子は満州の通信省官舎で暮らしていました。昭和20年4月に父が沖縄へ出征した後、すぐに戦死しました。母は関釜連絡船で帰国を決心しました。日本の敗戦がほぼ間違いないということで略奪が頻発しており、釜山では荷物を盗られたり大変な目に遭いました。ようやく父の実家（広島市・大手町）にたどり着いて、しばらくそこに滞在した後、疎開準備のために母の実家（水主町）に寄っていました。母は25歳、姉は4歳、ボクは3歳でした。

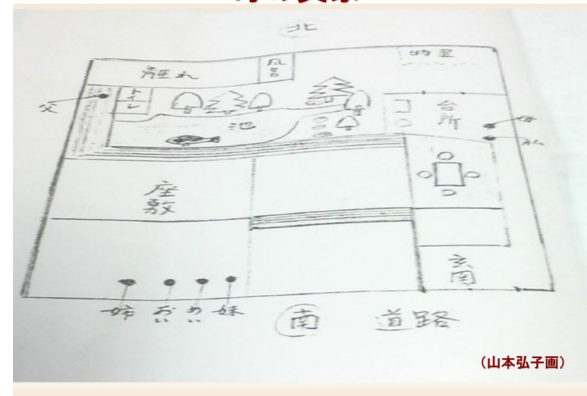
ここからは当時の幼い自分の視点でお話しますので、「私」ではなく「ボク」という言い方になります。

被爆の瞬間

「ピカッ」と目が眩む閃光の後、物凄い爆風で吹き飛ばされて地面へ落下しました。ほんの僅かな時間に落下したものと思いますが、その時は随分長い間空中を遊泳していたように感じました。

そこへ家がミシッと音を立てて崩れて覆いかぶさってきました。一家全員生き埋めになっ

母の実家



ていた時間はどれくらいだったのでしょうか。30分後にはすべてが燃えていたことから、生き埋め時間は25分くらいだったと思います。きのこ雲で真っ暗になってまったく何も見えませんでした。

母の実家は庭に鯉を飼っていて、私はたまたま母から呼ばれて庭先から座敷の奥の方に来ました。この図を書いたのが母の妹なので「おい」とあるのが私です。「父」が祖父、「私」が叔母です。もし私がそのまま鯉を見ていたら、瞬時に焼けたでられて死んでしまったと思います。

「お母ちゃん、助けてー」と何度も叫びた

かったのですが、声が出せませんでした。その場面はその後繰り返し「夢」の中に登場し、いつも「助けてもらいたい時に声が出ない」ところで目が覚めるようになりました。ずっとこの同じ夢にうなされ続けていましたが、「夢療法」という心理療法を受けて、やっとこの夢から逃れることができました。しかし被爆後70年近い今でも「助けてー」の声が突然口から飛び出して、自分も周りの人もビクビクすることがあります。

一緒に生き埋めになっていた祖父に、叔母と共に掘り出されました。みんなでお母ちゃんとお姉ちゃんを探してくれて、やっとのことで会うことができました。

なぜ爆心地近くに長時間いたのか

周り中ガレキの山と炎の中をみんな裸足で、母は4歳の姉の手を引き、私は女学生だった叔母に抱っこされて、明治橋のたもとまで逃

夕方の明治橋



げました。しかし、そこから先へは進めません。動けないので、瓦礫が燃えて熱い中、明治橋のたもとで半日余り、飲まず食わずで助けを待ちました。

夕方になると、熱風で皮膚が剥がれて垂れ下がり、幽霊のように手を前に出して歩いている人、大火傷で真っ赤な人、怪我で血だる

その後 (山本弘子画)



まの人たちが集まってきました。それらの殆どの人がその夜のうちに亡くなりました。

なぜ、そんなひどい所にとどまったのかと、よく聞かれるのですが、爆風で家から外へ飛ばされたので私たちはみな裸足でした。炎上している瓦礫の山を裸足で乗り越えるのはできません。また、しばらく時間が経つと累々たる屍が目飛び込んできました。その屍を裸足で踏んづけて乗り越えることもできませんでした。

その日の夜、私たちが幼かったため祖母らとは別に、特別に陸軍の暁部隊の船に乗せてもらい、宮島のお寺(大聖院)へ移動しました。その日に食べたのは夕方、軍から貰ったミカンの缶詰1個だけで、猛暑の中、水もおにぎりもありませんでした。そこで数日間雑魚寝した後、祖母の従姉妹宅へ身を寄せました。

放射能で母と姉が次々と…

しかし母は25歳、姉は4歳で帰らぬ人となりました。二人とも被爆1ヵ月以内に原爆症によって毛髪は抜け、唇を始め身体は青黒く変色し、発熱、下血、鼻血などの症状をみせながら相次いで亡くなりました。母は「そんなに親切にしてくれたら、あの世へ逝かれん」と言いながら息を引き取ったのです。放射能によって体中の細胞が次々と死滅(アポトーシス=細胞の集団自殺=壊死)していく苦しみの中、生きる希望を失った最期の感謝の言葉でした。3歳のボクも同じような症状でしたが、当時のお医者さんたちから「外傷が大きかったので、逆に細胞が自殺を諦め、必死に生き延びた」のではないかとされています。

6歳まで生死の境

奇跡的に生き延びたボクも「生きる屍(しかばね)」状態でした。祖父が葬儀屋に母・姉の葬儀を頼んだ際、葬儀屋が「この子の葬儀も一緒に」と言ったそうです。その祖父も半年後に原爆症で死にました。

ボクは、爆風を受け、無数の傷口からは血がほとばしり出ました。祖母の弟が皮膚科の医師でしたので、ダイアジンという錠剤を貰って、それをガーゼに包んで金槌で叩いて粉にして塗りました。しかし痛いばかりで、何の効果もなく、その傷口が化膿して閉じるのに7年かかりました。

体力の回復には実に30年の歳月を要し、健康とはどういうことなのか、まったく分からない状態でした。胃腸や心臓が弱く、いつも

目まいがしていました。めまいがあるのが普通の状態と思っていたので、めまいでお医者さんにかかったのは31歳の時でした。座るのがしんどいので、よく寝転んでいました。

母の死後ボクは、父方の祖母に養われることになりました。その祖母は爆心地周辺の屍を踏み分け、俯せになっている人を揺り起こして私たち親子を探し回ってくれたのです。

主食はサツマイモとジャガイモでした。おやつにカタツムリを七輪で焼いて食べました。イナゴもたくさんいましたが、網も何もなく、捕まえられませんでした。祖母はミカンの中身をボクにくれて、自分は皮を食べていました。よちよち歩きでしたが、藁ぞうりを履いて走るとパタパタと音がして、少しは速く走れるようになったと嬉しかったことを覚えています。祖母は多くの品物を売って、柔らかいゴムまり（ボール）を買ってくれました。嬉しくてたまりませんでした。その優しい祖母も3年半後に原爆症で亡くなりました。

小学生時代は下痢・頭痛・貧血・目まいに悩まされ、年に何度かは心臓が弱って「雨戸を閉めて寝たきり」で過ごしました。当時、テレビもラジオもありませんでしたので、雨戸を閉め切って、節穴から入ってくる光を見て過ごしました。小学館の雑誌が唯一の読み物でした。

「かけっこ」はいつも一番ビリで、キャッチボールはしたことがなく、今でもできません。勉強もできませんでした。小学6年間で宿題は一度もできませんでした。

サバイバース・ギルト (生き残ってしまった罪悪感)

母と姉は、被爆直後、ぐずる私を連れて逃げ回るのに大変な労力を費やしたと思います。母と姉の死は、私にとって「ボクがいい子にしていなかったから、お母ちゃんとお姉ちゃんが死んじゃった」と、自分を責め続ける苦しい人生の始まりでもありました。小学校1年頃には「ボク、いい子になるから、お母ちゃん、帰ってきてー」と何度も叫びました。

ボクの中で、家族の中で一人だけ生き残った「自分を責め続けて」いるボクがいます。



100歳で亡くなられた新藤兼人監督も、一緒に招集された仲間たちのほとんどが戦死したことで「自分は何で生きとるんじゃ」と問い続けた人生であったと、生前言っておられました。

今もある原爆の恐怖

私は、子どもの頃から白血病になるのではないか、気が狂ってしまうのではないかと心配してきました。未だに、思わず「タスケテ」（意味不明）の声が口を衝いて出ることがあります。何度も被爆の瞬間が、昼はホッとしたり、夜は夢の中で、「昼も夜もいつも思い出されて気が狂いそう」になり、休憩時間が怖いという人生だったと思います。白血病やガンへの恐怖も一時よりは弱まりましたが、未だに続いています。今でも唇は黒いままです。

最近になって被爆者の間に第二の白血病と言われる骨髓異形成症候群（MDS）や多重ガンが多発しています。なぜ、被爆から60年以上も経ってからMDSを発症するのか。被爆により遺伝子に小さな傷がつき、その傷が遺伝子の異常を誘発し、60年後に大きな傷となり白血病を発症するのでないか、というのが長年被爆者医療を研究している医師たちの見解です。私と一緒に被爆した叔母の二人とも多重ガンで俯しています。私もいつそうなるか、という不安を胸に暮らす毎日です。以上が私の被爆体験の説明です。

3. 平和への道

「平和への道」ということに少しふれておきたいと思います。ヒバクシャとしての提言ですが、世界中の政治に携わる人たち、特に

大統領とか首相などリーダーの方々には、ぜひ広島へ来て原爆の実態を見ていただきたい。また、今日ご参加いただいた皆さまのように

「原爆投下は仕方なかった」などとはとても言えない実相を見て、聴いて、その上で平和のために取り組んでいただきたいと思います。

いかなる戦争も起こしてはならない 核兵器は持たないのが一番

もう一つ、人は戦争の名の下に数々の殺戮を繰り返してきました。通常の状態なら正しく判断できることが、戦争状態になると判断を間違える生き物であることを認識する必要があります。ですから、いかなる戦争も起こしてはなりません。いかなる理由があろうとも核兵器を使ってはならないのです。核兵器を持っていると戦争状態になった場合使いたくなるのが人間の性ですから、「持たない」



というのが一番です。原爆は通常爆弾を何十万トン集めたに匹敵する破壊力だけでなく、それをはるかに超えた悲惨さを持っているのです。

原爆は戦争の抑止力にはなりません。原爆は「絶対悪」です。核拡散は防止せねばなりません。核兵器廃絶は是非とも成し遂げねばなりません。攻撃や報復は平和には決して繋

がりません。「平和をもたらすのは、お互いの違いを受け容れた信頼、尊敬のコミュニケーションだけです」。

福島第一原発事故からの復興についても私なりに活動しています。被曝された人々から、私が比較的元気に暮らしている姿を見て少し気持ちがラクになった、と言ってもらいました。今日はこのことについては割愛させていただきます。

以上で、被爆の実相・私の被爆体験・平和への道のあり方について終了させていただきます。ご静聴ありがとうございました。

質問に答えて

(質問) お話を聞いて、原爆から受けた大変な苦しみを乗り越えて来られた。心理的な面の他に身体の健康についてはどのように考えてこられたのでしょうか。

(飯田) 私は健康によい、と思われるものは、何でも過剰と言われるくらい実行してきました。早寝早起き、腹式呼吸はもちろん、肉類より野菜がよいと言われ、肉を減らして大失敗したこともあります。極端な貧血を起こし、お医者さんにこっぴどく叱られ、その治療に3年かかりました。その後は栄養バランスを大切にしています。

サプリメントも良いと言われるものは何でも試し、月に5万円ほど42年間続けています。たくさん摂取しているのが効いているのかさっぱりわかりません。しかし摂らないと不安で、サプリメント依存症と言えるかもしれません。体によいと思われるものは何でもする、そのおかげで72歳の今日まで生きてこられたと考えるようにしています。

閉会挨拶



核兵器廃絶をめざす富山医師・
医学者の会 世話人副代表

小熊 清史 氏

飯田さんありがとうございました。今日は多数、参加いただきましてありがとうございます。

映画「千羽鶴」、白黒でびっくりされたかも知れませんが、とても感慨深い映画だったと思います。

田島さんからのお話があったように、語り伝えていく人たちが少なくなってきた、こういう機会が貴重なものになっていくと感じます。

飯田さんのお話の中で、ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ、ノーモア・ヒバクシャ、そのためには戦争そのものをなくさなきゃならない、と強調されました。私自身も戦後生まれで実体験としてありません。子や孫の世代になると戦争体験を聞くことがまったくできなくなります。参加されたみなさん、ぜひ今日のお話を自分の子どもや孫に伝えていって欲しいと思います。

ではこれで終了とさせていただきます。

2012～2013年度の活動報告

12年	8月	講演会「チェルノブイリからフクシマを考える」
		ニュース発行
		志賀原発ストップ再稼働集会で挨拶（小熊副代表）
		I P P N W世界大会広島に参加（金井代表）
	9月	地域の学習会で講師（小熊副代表）
10月	反核医師の会のHP（ホームページ）を公開	
13年	2月	声明「北朝鮮は核実験・核開発をやめ…復帰を」
	3月	第36回世話人会
	7月	夏のイベント準備打ち合わせ会
	8月	アニメ「はだしのゲン」上映と被爆体験を聞く会
	10月	ニュース発行
		第37回世話人会
	11月	片山喬顧問が逝去
		声明「憲法違反の特定秘密保護法に反対する」
秘密保護法反対緊急集会への賛同		
14年	5月	第38回世話人会
	7月	声明「集団的自衛権行使容認の閣議決定に抗議」
		夏のイベント準備打ち合わせ会

◆ストップ！原発再稼働集会でスピーチ

8月18日、富山城址公園において、北陸電力志賀原発の再稼働反対の大きな集会在開催された。主催は多くの市民団体が参加した実行委員会。この集会の呼びかけ人の一人として当会的小熊世話人代表が名を連ね、集会での挨拶を行った。



小熊副代表は「私たち核兵器廃絶医師の会は、これまで原発について明確に反対してこなかった。しかし3・11を経験し、原発は核兵器と同様、人間の健康と環境に計り知れない被害を及ぼす。人類の未来にとって相容れないものであり、私たちは速やかな廃炉を求めていく。」と、当会の姿勢をアピールした。

◆I P P N W世界大会広島に参加

8月24日～26日、広島に於いて、I P P N W世界大会が開催された、当会の金井世話人代表が参加した。



金井代表は到着後から「被爆2世医師シンポジウム」「全体会：原発の健康と環境への影響」「福島原発事故の経緯と医療支援」などに旺盛に出席し、原子力エネルギーの是非については、I P P N W内部でも意見が分かれている状況だが、近い将来脱原発が公式見解となる日が必ず来るはずだと感想を報告した。

◆講演会「チェルノブイリからフクシマを考える」

～子どもたち原発の危険から守るために～

2012年8月2日に、石川県能美市の小児科医師、吉田均氏を講師に講演会を行った。



37人の参加があった。

吉田氏は「原発の危険から子どもたちを守る北陸医師の会」の世話人を務め、5月に北陸医師の会が翻訳した「チェルノブイリの恐ろしい健康被害」（ドイツ放射線防護協会とI P P N Wドイツ支部の共著）をぜひ多くの人に読んで欲しいと訴えた。

講演は、①チェルノブイリの健康被害、②被害を矮小化させようとする人々について、③低線量被曝は危険か、について豊富なデータを提示しながらすすめられた。

講演後、本会の第12回総会を開催し、過去2年間の活動報告と今後の方針、決算・予算案を承認し、世話人全員の留任を確認した。

◆ホームページで情報発信

10月5日、本会のホームページがスタートした。内容としては、1989年の結成総会の様子や設立発起人の懐かしい方々の発言や、今まで



発行した会報のバックナンバーを閲覧でき、その時々のお出来事にたいする当会の対応の足跡がわかる構成となっている。

当面、保険医協会のサーバーの一部を借りて運営していく。

◆アニメ「はだしのゲン」上映と被爆体験を聞く会

2013年8月1日、当会と県被爆者協議会、「はだしのゲン」をひろめる会の共催で開催した。

会場となった富山電気ビルは中学生以下の子ども25名を含む、146名の参加者でいっぱいになった。

会場では子どもたちがゲンの戦後の悲惨な状況をたくましく生き抜く姿を食い入るように見つめ、あちこ

核兵器のない平和な世界を子供たちに残そう！

第1部 アニメ「はだしのゲン」上映会 (10:00~11:30)

第2部 被爆体験を聞く会 (11:40~12:30)

会場 富山電気ビル 5F 中ホール

日時 8月11日(日) 午前10時00分~12時30分

参加費 無料

申込者 申込者 申込者

申込者 申込者 申込者



ちで多くの参加者が涙を流し鑑賞していた。アニメ上映後、県被爆者協議会の岸川義一氏、柴田政一氏、田島正雄氏が広島での体験を話された。

◆声明「憲法違反の特定秘密保護法に反対する」

11月14日、安倍内閣が国会に提出した「特定秘密保護法案」にたいし、会として声明を発表。秘密の範囲に定めがないこと、永遠に秘密にできること、国会議員や裁判官・弁護士にも明らかにされないこと、一般人まで罰則の対象としていることなど、民主主義を破壊するものであり、憲法の基本的人権の尊重や国民主権から著しく逸脱するものとして反対した。

◆集团的自衛権行使容認の閣議決定に反対

2014年7月3日、安倍内閣が行った「集团的自衛権行使を容認する閣議決定」にたいし、会として声明を発表。いつかの政府が憲法改正の手続きを経ることなく9条の平和主義を形骸化させることは、この国のかたちを壊すに等しい暴挙と批判した。

今期発行の会報

2012年8月10日

核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会 会報

2012.8.10 核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会 富山市桜橋通り6-13 電話 076-442-8000

講演会 チェルノブイリからフクシマを考える

子どもたちを原発の危険から守るために

講演会の司会を務めた 小栗野子世話人

8月2日、核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会は富山電気ビルにおいて「チェルノブイリからフクシマを考える～子どもたちを原発の危険から守るために」をテーマに講演会を開催しました。講師は石川熊鷹市の小児科医師、吉田均先生。事前申込人数を大幅に超えて37人の参加がありました。講演会後、会は第12回総会を開催。この2年間の活動報告と今後の方針、決算報告・予算案が承認されました。また世話人も全員が宿役、最後に金井代表が今後のさらなる発展をめざして決意を述べました。

講師 吉田均先生 石川熊鷹市・小栗野子世話人

主な内容

- 講演会 主催者挨拶 (金井代表) 2
- 講演録「子どもたちを原発の危険から守るために」 3~ 8
- 第12回総会で承認された議案(2010~2011年度の活動報告) 9~10
- 活動方針、決算・予算・役員改選 11~12
- 声明：関西電力大飯原発の批准を再稼働反対する 12
- 7/28富山市で開催された政府主催エネルギーに関する意見聴取会から 13~15
- 案内(8/14再放送、8/14朗読劇、8/18志賀原発再稼働を許さぬ集会) 15~16

2012年8月10日付

2013年10月5日

核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会 会報

2013.10.5 核兵器廃絶をめざす 富山医師・医学者の会 富山市桜橋通り6-13 電話 076-442-8000

8/11 核のない世界を未来の子どもたちへ

アニメ「はだしのゲン」上映と被爆体験を聞く会

会場の富山電気ビル5F中ホール (2013年8月11日)

8月11日、核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会(以下反核医師の会)、富山県被爆者協議会、「はだしのゲン」をひろめる会・富山準備会の三団体の共催で、アニメ「はだしのゲン」上映と被爆体験を聞く会を開催しました。会場となった富山電気ビルは中学生以下の子ども25名を含む、146名の参加者でいっぱいになりました。司会を反核医師の会の小栗清史世話人代表が務め、主催団体を代表して反核医師の会の金井英子世話人代表が挨拶しました。アニメは、作者中沢啓治氏の体験に基づく原爆の惨禍や当時の時代背景・世相を描いた

主な内容

- 「はだしのゲン」上映と被爆体験を聞く会 主催者挨拶 (金井代表) 2
- 被爆体験を聞く会 岸川義一氏、柴田政一氏 3
- 田島正雄氏 4
- 富山県被爆者協議会の文庫「叫び」から 水野耕子氏 5
- 投稿「NHK終わらなげと観たいのを見て」 5
- 投稿「日本外来小児科学会WS」「真実は隠蔽されてはならない」 6~7
- 投稿「アベノアゼンプレゼン」 8

2013年10月5日付

2014～2015年度の活動方針

- (1) 核兵器廃絶への世論形成に努める事業
 - ・核兵器廃絶への世論形成に役立つ可能な限りの活動を行う。
- (2) 原発事故による健康被害を防止し、エネルギー政策の転換を求める活動
 - ・福島第一原発事故の真相究明と、健康被害をなくすための活動を行う。
 - ・既存の原発のすみやかな廃炉をめざし、原発に依存しないエネルギー政策への転換を求めていく。
- (3) 集団的自衛権行使容認に反対し、憲法を守り、平和を希求する活動
 - ・集団的自衛権行使容認と関連法案の改悪に反対し、日本国憲法第九条を守る活動を積極的に行う。
- (4) 県内外の非核・平和団体との協力、共同の取り組み
 - ・県内の非核、平和団体と積極的に協力していく。
 - ・「核戦争防止、核兵器廃絶を求める医師・医学者のつどい」に参加する。
- (5) 組織の充実、発展をめざす
 - ・会報の定期発行と会員増加を図る。

決算報告・予算

2012年度および2013年度会計報告

自:2012年 7月 1日
至:2014年 6月30日

決算

収入の部		
年会費	¥	315,000
雑収入	¥	1,004
前年度繰越金	¥	53,860
<hr/>		
合計	¥	369,864
支出の部		
会議費	¥	59,990
事業費	¥	118,300
事務費	¥	6,680
協賛金	¥	-
雑費	¥	-
<hr/>		
小計	¥	184,970
翌年度繰越金	¥	184,894
<hr/>		
合計	¥	369,864

2014年度および2015年度予算(案)

自:2014年 7月 1日
至:2016年 6月30日

予算(案)

収入の部		
年会費	¥	400,000
雑収入	¥	10,000
前年度繰越金	¥	184,894
<hr/>		
合計	¥	594,894
支出の部		
会議費	¥	40,000
事業費	¥	350,000
事務費	¥	10,000
協賛金	¥	-
雑費	¥	-
<hr/>		
小計	¥	400,000
翌年度繰越金	¥	194,894
<hr/>		
合計	¥	594,894

核兵器廃絶をめざす富山医師・医学者の会世話人会

■世話人代表

金井 英子（砺波市・金井医院・小児科）

■世話人副代表

黒部 信也（富山市・富山協立病院名誉院長・内科）

小熊 清史（魚津市・小熊歯科医院・歯科）

（新）小栗 絢子（高岡市・小栗小児科医院・小児科）

■世話人

太田 真治（高岡市・おおたファミリー歯科・歯科）

瀧 邦彦（富山市・滝医院・放射線科）

塚田 邦夫（高岡市・高岡駅南クリニック・外科）

矢野 博明（射水市・矢野神経内科医院・内科）

山本 美和（富山市・富山協立病院・内科）

与島 明美（富山市・富山協立病院・内科）

会費納入のお願い

私たちの会の活動は、会費中心に運営しています。活動の基盤となる財政を確保するため、先生の入会ならびに2014年会費の納入をお願いします。

会の趣旨に賛同し、入会を了承される先生は、FAXまたは電話でその旨ご連絡ください。会費納入用郵便振替票をお送りします。

◇年会費 5,000円（毎年7月が期首）

◇振込方法

「郵便振替票」をご利用下さい。

◇連絡先

核兵器廃絶をめざす

富山医師・医学者の会

富山市桜橋通り6-13

フコクビル11階 TEL 076(442)8000

編集後記

- ・私なんかは5歳の記憶も定かではない。飯田氏の被爆体験が非常に具体的なので「3歳でよく覚えていますね？」と聞いてみた。
- ・夢に見るのだという。それも同じ場面を。強烈な心象と、一緒に居て被爆した叔母からの詳しい説明から、鮮明な記憶として刻み込まれたのだろう。
- ・その飯田氏の年代がほぼ最年少被爆者だ。被爆者の平均年齢は80歳を越えている。彼らから直接その体験を聞ける機会は、そう多くはないのではないか。
- ・飯田氏は何度も強調した。「核兵器を持っていると戦争になったら使いたくなるのが人間の性」「人は戦争状態になると判断を間違える生き物」「だからいかなる戦争も起こしてはならない」
- ・しかしいま平和国家日本が、安倍政権の解釈改憲によって他国の戦争に荷担する危険な国に改変されようとしている。（S・M）